

琉球新報

昭和二十六年九月一日創刊
発行所：沖縄県那覇市
電話：3333
印刷所：琉球新報印刷部

うるま新報
改題

一九五二年（昭和二六年）九月、サンフランシスコ対日平和条約及び日米安全保障条約の締結により、日本国に独立が認められる。翌五二年四月の両条約の発効にともない、琉球列島は「本土」から切断される。沖縄はアメリカの支配下に琉球政府を足させるが、依然として苦難の道を辿る。米軍はさらなる基地強化に乗り出し、各地で軍用地の強制接収を行なった。

弊社は、一九九九年に『うるま新報』全六卷（二号〜八六六号）を復刻刊行し、多くの方から敗戦直

うるま新報改題 琉球新報

縮刷版

軍事基地化されていく 沖縄県1950年代の 日々を追う！

後の沖縄県民の姿を映す貴重な資料であると高い評価をいただいた。
このたび『うるま新報』の継続改題紙である『琉球新報』の一九五一年九月十日（八六七号）から奄美大島日本復帰に至る一九五三年十二月三十一日（一六八八号）までを第I期として復刻する。

社告

本紙は一九四五年七月に日本が無条件降参を遂げ、沖縄島の余じんごに創刊され、住民に正しい報道を提供、これによつて多くの生命を死への道から救つた歴史を持つことを誇りとするものであります。そののちの復版からマイクロ版に創刊から日九の復版を継がせに先んじて発行、読者各位の要望となえて来ましたが、今遂に大激動する世界情勢に對し一層の努力を払ふ覚悟を有ります。

今回が「うるま新報」を「琉球新報」と改題することになりましたが、これは進歩年いらいの例とされ来たのでありまして、購読者の締結を維持することになったのであります。琉球新報社臨時における沖縄県民の新聞であり、うるま新報が戦後最も古い歴史を持つたことにより、さきより各々であります。われわれは神々の本脈の脈を断しぬよう新聞の使命に全力を注ぐつもりであります。どうか読者各位の御愛護御心遣のほどをひたしにお願ひいたします。

うるま新報社

第I期 全9卷

1951年9月→1953年12月

●定価＝本体揃価格2752、000円＋税

不二出版

日本占領と日本独立を 照らしだす沖縄の存在

我部政男
山梨学院大学大学院社会科学部教授

占領下の日本は、アメリカ軍の直接統治下にあった南の島々の沖縄諸島を忘
却していた。
アメリカによる占領の共通体験は、日本と沖縄の両者にとって相互に思いおこ
すことすらなかったとしても、何ら不思議ではない。
話題の多いジョン・ダワー氏の『敗北を抱きしめて』（岩波書店）によると、敗戦
後の日本人は、アメリカから与えられた戦後改革の日本国憲法を強く抱きしめ
て、戦争責任を追究することもなく、戦争の傷を忘れようと努力した。このこと
は、冷戦の成立によって、日本人に幸いしたのかもしれない。地上戦を経験した
沖縄人は、敗北の実感を抱きしめる時間的な余裕もなく、行政的に日本国家
から分断され、アメリカの軍事支配下におかれた。沖縄人が抱きしめたのは、軍
事支配への反抗と幻の祖国・日本国家への帰郷意識の願望であった。
敗戦国日本が、世界的な冷戦体制下の中で、欧米勢力への加人を条件に、独立
を達成し、占領から国際社会に復帰した時、沖縄の二つの新聞は、『うるま新報』
から『琉球新報』に名称を変更した。日本の独立が、忘却の彼方から沖縄の存

民衆にとつての「冷戦体制」とは 何だったかを考える一級の資料

門奈直樹
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科長・教授

『うるま新報』から『琉球新報』への改題は一九五〇年九月二〇日
である。その二日前の同年九月八日、対日平和条約と日米安保条約が調印され
た。反共軍事基地としての沖縄の米軍支配が明確になる。以来、米軍は占領の
正当化と彼らの行動上の便宜を図るために過酷な言論統制を行った。
たとえば、米民政府は五二年、本土への留学生で「赤化」せる者は留学を取り
消すと言った。同年暮には雑誌『平和』の執筆者三人が米軍を誹謗したとして
逮捕されるが、そうした時期、ビートル・民政副長官は「人民党は共産党であ
るから非合法化しなければならぬ」と強調した。それに対して『琉球新報』は
「ビ少尉の声明を通して琉球処分を思う」という社説を掲載し、ビ声明を受け

在を引き寄せることを祈願しての行為であつたらう。しかし、吉田ドクトリンに
よつてくり出された日本の国際関係のなかの沖縄は、その期待がごとごとくう
ち砕かれていく厳粛な過程でしかなかった。
当時の沖縄人のさまざまな思いを克明に記録し、後世に伝える使命を『琉球
新報』は、強く意識していた。記事の行間にそのことをにじませている。
戦後占領期の日本の歩みは、同時代の沖縄のたどつた異民族支配の鏡に映し
て初めて、その実像を結ぶことになるはずである。戦後日本の潮流は、沖縄の上
におおいかぶさつた占領の歴史を正確に取り込むことなしには、成立し、完成し
得ない側面を持つている。
その意味で少なくとも『琉球新報』の復刻は、その基礎的な条件を整備する
のみならず、最も欠落した部分を補強することになるであらう。占領戦後史研
究の方向は、『琉球新報』の復刻に刺激され、アメリカのナショナルアーカイブス
から提供された資料の分析及び駆使と相まって、多様な考察を可能にする新た
な肥沃の原野を獲得することになるであらう。

入れる論を展開する。

当時、新聞の発行は「免許制」。もしも米軍に反発したら、途端に発行停止
処分が下される。同紙が迎合の論陣を張つたのはそのためであつたらうか。概し
て、同紙のこの時期の言論は米軍への直接批判を避け、ある場合には自己を戒
め、またある場合には問題の所在をあいまいにしながら、その最終段階では意識
するとならないにかかわらず、強者におもねる傾向にあつたといえる。
今期分の復刻は民衆にとつて「冷戦体制」とは何だったかを考える一級の資料
として、戦後沖縄の屈辱と苦悩の歴史の一端を見せてくれる内容になつている。

戦後沖縄史略年表 (新聞を中心に)

1945年7・26	『ウルマ新報』創刊 日本の無条件降伏で十五年戦争終結 東京で沖縄人連盟発足	1949年3・18	うるま新報社・沖縄タイムス社・沖縄毎日新聞社加盟「沖縄新聞協会」発足 日本政府、本土からの沖縄への渡航者に旅券発行開始 米議会、沖縄から日本本土への渡航許可 本格的基地建設始まる
8・15	東京で沖縄人連盟発足	5・17	毛主席、中華人民共和国成立を宣言
11・11	沖縄人連盟機関誌『自由沖縄』発刊	7・1	『沖縄ヘラルド』創刊
12・16	福岡で『沖縄新民報』発刊	琉球放送局(AKAR)放送開始	
1946年1・25	GHQ、日本と南西諸島の行政分離宣言	12・12	GHQ「沖縄に恒久的基地建設はじめる」と発表
1・29	『沖縄新聞』創刊(10月18日廃刊)	『琉球日報』創刊	
5・4	『宮古タイムス』創刊	朝鮮戦争勃発	
5・10	『ウルマ新報』から『うるま新報』へ題字変更	日本で報道関係のレッドパージ始まる	
5・29	『宮古大衆新報』創刊	琉球大学開学	
7・1	日本国憲法公布「1947年5月3日施行」	沖縄群島議会「日本復帰要請」を決議	
11・3	『先島時報』、『みやこ新聞』に合併	日本復帰促進期成会誕生(五月二〇日から日本復帰署名運動展開)	
1948年6・18	『先島時報』、『みやこ新聞』に合併	日本本土から土建業者が大挙来島。基地建設ブーム始まる。	
7・1	『沖縄タイムス』創刊	日本、財閥解体完了	
7・12	『沖縄毎日新聞』創刊	日米安全保障条約及びサンフランシスコ対日平和条約調印	
11	比嘉春潮編『沖縄文化』刊行	『うるま新報』をサンフランシスコ対日平和条約調印を記念して『琉球新報』に復元改題	
		北緯一九度以北の奄美群島(七島)が日本復帰 親子ラジコ登場	
		琉球政府発足。米民政府、初代行政主席に比嘉秀平を任命	
		対日平和条約、日米安保条約発効	
		米民政府布令「軍用地の契約権について」公布(軍用地問題表面化)	
		沖縄諸島祖国復帰期成会発足	
		米政府布令「土地収用令」公布	
		板門店で朝鮮休戦協定調印	
		ニクソン米副大統領来沖。「共産主義の脅威ある限り沖縄を保持」と声明	
		奄美大島祖国復帰実現	

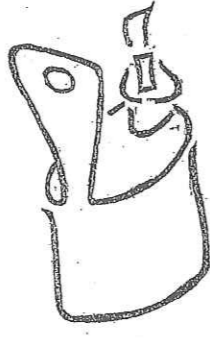


題字の移り変わり

*本年表及び題字は『琉球新報百年史』(琉球新報社)を参考にさせて頂きました。

歴史的日米野球

豪華に圧倒 竹内さん悲喜こもも



文化

命懸けに挑んだ竹内さん... 歴史的な一戦となった。...



「うるま新報」から「琉球新報」へ (1951年9月・那覇市三原)

「琉球新報」第917号(1951年10月31日)四画



竹内さんの活躍... 歴史的な瞬間を捉えた写真。...

「琉球新報」号外(1953年4月)

Table listing candidates for the Diet (衆議院議員当選者一覽) across various regions like 関東, 埼玉, 茨城, etc.

琉球新報 号外

発行所 琉球新報社 那覇市3区15里 電話 那覇305・306

Multi-column text block with a large title '罪ふかい戦争' and sub-headers like 'ひめゆりの塔'.

「琉球新報」第1422号(1953年4月4日)四画

Large text block with title '問題の布令第一〇九号' and '土地収用令全文'.

THE RYUKYU SHIMPO 1946年7月18日 3種郵便物認可 号1611. Main headline: 奄美大島きょうから再び日本へ 返還協定昨夕調印さる.

琉球新報

発行所 琉球新報社 那覇市3区15里 電話 那覇305・306



祝賀決議案 衆議院可決

琉球新報 [縮刷版]

第1期 全9巻

●縮刷版概要…………… B4判・上製本・総3,054頁

●縮刷版内容 巻数は「うるま新報」の巻数を継続する

復刻版巻数

頁数

配本年月

第7巻——1951年9月～12月

258頁

2003年10月刊

第8巻——1952年1月～3月

286頁

◎本体揃価格84,000円
ISBN4-8350-5232-3

第9巻——1952年4月～6月

352頁

'03年度刊
84,000円

第10巻——1952年7月～9月

358頁

2004年4月刊

第11巻——1952年10月～12月

358頁

◎本体揃価格84,000円
ISBN4-8350-5236-6

第12巻——1953年1月～3月

360頁

'04年度刊
168,000円

第13巻——1953年4月～6月

362頁

2004年10月刊

第14巻——1953年7月～9月

360頁

◎本体揃価格84,000円
ISBN4-8350-5240-4

第15巻——1953年10月～12月

360頁

琉球新報概要

●原本提供…………… 沖縄県立図書館・琉球新報社資料室

●解説…………… 新崎 盛暉（沖縄大学教授）〔解説は第7巻の巻頭に収録〕

●推薦…………… 我部 政男・門奈 直樹

●刊行部数…………… 限定150部

●定価…………… 全9巻・本体揃価格252,000円＋税〔各巻28,000円＋税〕

うるま新報 [縮刷版] 全6巻

●縮刷版概要…………… B4判・上製本・函入・総1,944頁

●収録内容…………… 第2号～第86号（'45年8月～'51年9月）

●原本提供…………… 沖縄県立図書館・沖縄県立博物館・琉球大学図書館・琉球新報社資料室

●解説…………… 新崎盛暉・丹野喜久子

●定価…………… 全6巻・本体揃価格168,000円＋税
ISBN4-938303-89-2

沖縄新民報・自由沖縄 [縮刷版] 全2巻

●縮刷版概要…………… B4判・上製本・総642頁

●収録内容…………… 『沖縄新民報』
第1号～第236号（'46年1月～'53年12月）
『自由沖縄』
第1号～第33号（'45年12月～'49年1月）九州版・関西版

●原本提供…………… 沖縄県立図書館・琉球大学図書館・新崎盛暉

●解説…………… 新崎盛暉

●定価…………… 全2巻・本体揃価格48,000円＋税
ISBN4-8350-0319-5

●表示価格はすべて税別。

不二出版

〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
フAX03-3812-4464
振替001600294084

琉球新報

第1111号
昭和26年9月1日
発行所 琉球新報社
印刷所 琉球新報社

うるま新報
改題

一九五二年（昭和二六年）九月、サンフランシスコ対日平和条約及び日米安全保障条約の締結により、日本国に独立が認められる。翌五二年四月の両条約の発効にともない、琉球列島は「本土」から切断される。沖縄はアメリカの支配下に琉球政府を足させるが、依然として苦難の道を進む。米軍はさらなる基地強化に乗り出し、各地で軍用地の強制接収を行なった。

弊社は、一九九九年に『うるま新報』全六巻（二号〜八六六号）を復刻刊行し、次いで、継続改題紙『琉球新報』全九巻（八六七号〜一六八八号）を第

うるま新報改題 琉球新報

縮刷版

敗戦から「島ぐるみ闘争」 実現に至る島民生活の 姿を活写！

社告

本紙は一九四五年七月に日本が無条件降参を遂行す、沖縄島の余じんを占に創刊され、住民に正しい報道を掲げ、これにより多くの生命を死への道から救った歴史を持つことを誇りとするものがあります。そのひらきの歴史から今日まで、本紙は常に日本の発展を我が身に感じ、発展を促すために、記者としての責任を全うしてきました。今再び「うるま新報」と改題することになりましたが、これは半世紀以上の歴史と蓄積された経験と、読者の信頼と、購読者の支持を礎に発行することになったのであります。琉球新報は戦前、戦中、戦後の歴史であり、うるま新報が戦後最も古い歴史を持つことになり、引き続き、うるま新報として発行し、われわれの誇り、本紙の歴史を輝かせるよう、新聞の使命に全力を注ぎたいと思っております。どうか読者の御愛護御へ、この機会をよき機会といたしませう。

うるま新報社

I期として復刻刊行した。

さらに、第II期として奄美大島日本復帰後の『琉球新報』一九五四年一月一日（一六八九号）から一九五五年六月三〇日（二二三一号）までを復刻し、このたび第III期として一九五五年七月一日（二二三二号）から一九五六年十二月三十一日（二七八〇号）までを復刻する。 [第III期にて縮刷版完結]

第III期 全9巻

〔1955年7月〜1956年12月〕

●定価 本体揃価格2,522,000円+税
●推薦 我部政男・門奈直樹

不二出版

琉球新報

縮刷版

第Ⅲ期 全9巻

第Ⅲ期 第25巻〜第33巻

縮刷版概要…………… B4判・上製本・総3、380頁

縮刷版内容(復刻版巻数及び配本回数は「琉球新報」第Ⅰ期・第Ⅱ期の巻数・回数に継続する)
復刻版巻数

第25巻	1955年7月〜8月	380頁	第7回配本
第26巻	1955年9月〜10月	348頁	2006年10月刊
第27巻	1955年11月〜12月	362頁	◎本体揃価格84,000円 ISBN4-8350-5256-0
第28巻	1956年1月〜2月	372頁	第8回配本
第29巻	1956年3月〜4月	376頁	2007年4月刊
第30巻	1956年5月〜6月	380頁	◎本体揃価格84,000円 ISBN4-8350-5260-9
第31巻	1956年7月〜8月	388頁	第9回配本
第32巻	1956年9月〜10月	388頁	2007年10月刊
第33巻	1956年11月〜12月	386頁	◎本体揃価格84,000円 ISBN4-8350-5264-1

琉球新報概要

◎原本提供…………… 沖縄県立図書館・琉球新報社資料室

◎解説…………… 新崎 盛暉(沖縄大学教授)〔解説は第25巻の巻頭に収録〕

◎推薦…………… 我部 政男(山梨学院大学大学院社会科学部教授)

門奈 直樹(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授)

◎定価…………… 全9巻・本体揃価格252,000円+税〔各巻28,000円+税〕

琉球新報

縮刷版

第Ⅰ期 全9巻

第Ⅰ期 第7巻〜第15巻(注 第1巻〜第6巻は前身紙「うるま新報」)

縮刷版概要…………… B4判・上製本・総3、054頁

収録内容…………… 第867号〜第1688号(51年9月〜53年12月)

◎原本提供…………… 沖縄県立図書館・琉球新報社資料室

◎解説…………… 新崎盛暉

◎定価…………… 全9巻・本体揃価格252,000円+税

琉球新報

縮刷版

第Ⅱ期 全9巻

第Ⅱ期 第16巻〜第24巻

縮刷版概要…………… B4判・上製本・総3、114頁

収録内容…………… 第1689号〜第2231号(54年1月〜55年6月)

◎原本提供…………… 沖縄県立図書館・琉球新報社資料室

◎解説…………… 新崎盛暉

◎定価…………… 全9巻・本体揃価格252,000円+税

●表示価格はすべて税別。

不二出版

T113・0023
東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
フAX03・3812・4464
振替00160・294084